

受賞の言葉

おびなた たかし

1985 年東京大卒、90 年同大学院経済学研究科博士課程修了。94 年東京大より博士号(経済学)を取得。東京大准教授などを経て、2008 年より同大学院経済学研究科教授。60 年生まれ。



会計学の存在意義を問い直す

東京大学教授 大日方隆

企業の利益率が産業平均に対して回帰することは、経済学、経営学では当然のこととして受け止められ、それは基本的な共通知識となっている。ところが、会計制度および会計学の領域においては未だに、この平均回帰について成熟した知見があるとはいえない。超過利益が永続するかのような「のれんの非償却」が、米欧の会計制度では義務づけられているからである。日本のなかにも、それを真似すべきであるという論者もいる。

利益率は産業平均に向けて回帰するのか、それを確かめなければ、会計学は孤立してしまうかもしれない。会計基準の設定が、現実の客観的把握とは無関係にすすめられるとしたら、経済学(者)や経営学(者)は、会計学(者)を疑いの眼差しで見るであろう。本書の研究動機は、会計上の利益率の平均回帰傾向を確かめることにより、経済学や経営学と比肩しうるはずの「会計学の存在意義」を問い直すことである。

本書の仮説はじつに素朴である。得られた実証結果にも大きな驚きはない。本書が最もこだわっているのは、検証結果の頑健性である。どの学問領域においても基本とされるような検証をきちんとこなさないかぎり、会計学は一人前として認知されないことを強く意識したからである。今回の栄誉は、会計学の存在意義の一端が社会的に認められたものとして、大変喜んでいる。今後もこれを励みとして、会計と会計学を問い続けていきたい。